

## 子育て期は、一番しんどいけれど、 一番幸せな時

京都府立医科大学小児科 三沢あき子

本邦では、仕事と子育てを両立する母親は、何らかの罪悪感を持たざるを得ない現状があります。子どもの保育園入園時には「小さいのに保育園に入れて、かわいそう」と言われ、小学校に入ると平日の昼間に母親は家にいるのがあたりまえという対応でした。今ではすっかり打たれ強くなりましたが、いろいろと悩んだ時期がありました。集団保育に入った年は、感染症にたびたび罹患します。子どもの体調不良が続くと、親もしんどくなります。頼れる身内がいないと、この時期のハードルが最も高く、医療職と子育ての両立は難しくなってきます。私も離職を考えた時期がありましたが「キャリアを途切れさせちゃダメだよ」と言って下さった上司に助けられました。子ども達は、保育園・小学校でたくましく成長しています。彼らに保育園・小学校があるように、私には私の職場があると思ってれています。一日ずっと一緒にいなくても、子ども達ときちんと向き合う時間を作ることで、親子共に成長していくことができます。子ども達に元気をもらえるのは、親の特権です。私自身は理想的な母親からは、ほど遠いのですが、子ども達は毎日「お母さん」と慕ってくれます。私も、子ども達に元気をあげることでできる母親であり続けたいと思っています。

自身の苦勞した体験から、京都府立医科大学に病児保育室を立ち上げました。医療者である親の子育て支援として、その子ども達にとってのより良い環境作りを目指しています。悩んでいた医療者が親子としんどい時期を乗り越え、笑顔になっていく姿をみるのはうれしいものです。小児科医は子ども好きでまじめだからこそ、自分の子どもにきちんと向き合うために辞めてしまう人が多いのかもしれませんが、小児科医は子育て経験が生きてくる職種です。やる気のある若手が子育てを経ても、本当にやりたい道を選択しキャリアアップできる環境整備および理解が広がっていくことを願っております。

(2012年12月記 所属はホームページ掲載時)



みさわ あきこ

**〔著者略歴〕 三沢 あき子**

京都府立医科大学小児科併任講師

同大学男女共同参画推進センター副センター長

8歳の長女と4歳長男の母

～男女共同参画推進委員会より～

**「大学病院における病児/病後児保育室について」**

当委員会の前身であるワークライフバランス改善ワーキンググループは、2012年に各大学のホームページを検索し、病児/病後児保育が設置されている大学の医学部を調べました。その結果、全国80大学の医学部のうち41大学(51%)で、病児/病後児保育の取り組みがなされていることがわかりました。平成18年度に採択された、大学における女性医師支援事業をきっかけに開設された病後児保育室がほとんどでした。

数としては満足できる結果ではありませんが、事業に対する国からの助成金の期限が切れた後も、各大学の自助努力により病児/病後児保育室が存続していることは、男女共同参画に対する理解が浸透しつつある結果といえると思います。

